

近江の彦根から 纏向遺跡に匹敵する大型建造物のある鉄器物流を担う拠点都市集落が出土
弥生末から古墳時代前期(3世紀～4世紀)の近畿北部の中心的大都市集落
「彦根市稲部遺跡」 現地説明会に参加 2016.10.22.



卑弥呼の時代に ヤマトと琵琶湖交通・東国を結ぶ結節点近江に「大和の纏向遺跡に匹敵する大型建物を持つ鉄の物流拠点」とみられる都市集落(彦根市稲部遺跡)が出土し、10月22日現地説明会が開かれた。

大型建物のすぐそばには、繰り返し継続して建て替えられた多数の鍛冶工房とみられる竪穴住居跡も出土し、鉄器物流を担う近江の拠点集落で、初期ヤマト王権に組み込まれていた近江の大勢力の拠点とみられている。

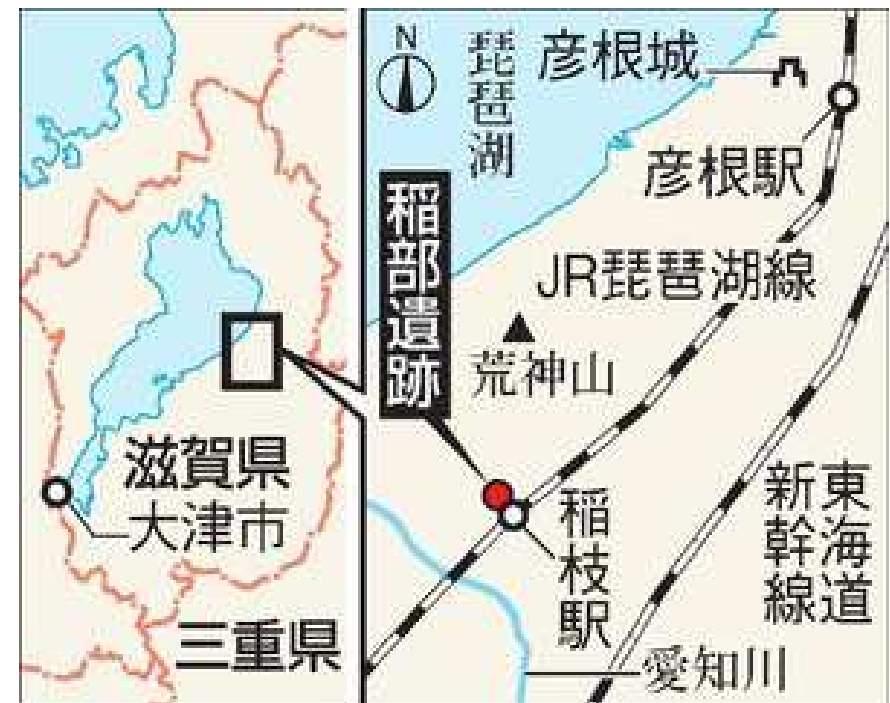
近江では纏向遺跡に匹敵する大型建物を有する大集落として、守山市の伊勢遺跡が出土しているが、この伊勢遺跡を引き継ぐかのように出土した稲部遺跡。

新聞を見て、興味津々で現地説明会に参加してきました。

非常に大勢の人が詰めかけました。

2世紀～4世紀にかけて、大和政権の成立からその後大和政権に組み込まれ、「鉄」で栄えた近江の拠点です。

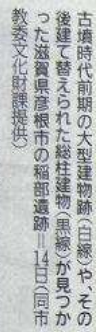
彦根市稲部遺跡 滋賀県彦根市稲部町441



弥生終末期～古墳前期 「鉄」で栄えた近江の中心都市集落 稲部遺跡

琵琶湖交通・北陸や美濃・尾張・伊勢など東日本と畿内をつなぐ交通の重要な結接点





交通要衝「イナベ国」か
東海や山陰の土器も出土

国内最大級の大型建
物跡と鍛冶工房跡とみ
られる遺構が見つつか
った滋賀県彦根市の稲部
遺跡。今回の調査から
は交通の要衝という近
江の立地を生かし、鉄
と交易で栄えた「イナ
ベ国」の存在が浮かぶ
(1面参照)

遺跡があるのは、北
東海への分岐点と
土しおろ各地との交
差するところだ。

なるJRM原駅から約
15km南西の地点。船が
使える琵琶湖も約4km
の距離。遺跡からは

鍛冶炉の発見が不可欠

村上恭通・愛媛大東アジア古代鉄文化研究センター長の話
鉄素材の加工に必要なハンマーや石台が出土しているものの、鍛冶工房と断定するには、炉の発見が不可欠だ。遺跡内のどこかに炉がある可能性があるのだ、今後の調査に期待したい。見つかった約6%の鉄片についても、総量した土を取り除き、実際の総量や形の把握などの精査が必要だ。

定森秀夫滋賀県立大教授（考古学）の話 稲部遺跡は弥生時代から古墳時代中期にかけて続いた遺跡で、古墳時代前期前半の豪族居館の成立過程が分かり、重要だ。弥生時代末から古墳時代初頭の鍛冶工房で使った鉄素材は朝鮮半島から輸入しており、それを入手できる強力な豪族の存在を示している。地理的に、大和の政権中枢から入手したのではなく、日本海ルートで独自に入手していた可能性があり、さらにその製品を東国へ

朝鮮半島から輸入したとされ、越前(福井県)の土器も出土していることなどから、イナベが独自に日本海ルートで入手していた可能性があるという。

大阪大の福永伸哉教授(考古学)は、邪馬台国が奈良、狗奴国は東の戸塚洋輔主査も一後る。

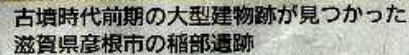
海地方にあったと推定した上で「中間に位置するイナベは双方を見ながらキャスティングポートを握る」と独自路線を歩んだのかもしれないと推測。発掘した彦根市教育委員会の大和政権にこつても近江は東日本に出る際に通る地域。政治的にうまく付き合おうとしたとみられ、イナベと結び付いた結果、大型建物が出現したのでは」とみている。

滋賀県彦根市の稲部遺跡で、古墳時代前期（3世紀中ごろ）の大型建物跡（面積188平方メートル）が見つかり、17日、市教育委員会が発表した。弥生時代末—古墳時代前期では、邪馬台国の有力候補地とされる纏向遺跡（奈良県桜井市）の大型建物跡（238平方メートル）に次ぐ規模だった。また当時では国内最大規模の鍛冶工房とみられる遺構も見つかった。

（30面に関連記事）

遺跡は東日本と西日本をつなぐ交通の要衝に位置。邪馬台国の頃にあった30国の一つとする見方もあり、邪馬台国から大和政権成立期に鉄と交易で栄えた一大勢力があったこと

邪馬台国時代の大型建物跡



建物跡は縦16・2の列もあり、豪族居館
跡、横11・6畧。柱穴などだった可能性があ
る。大きさは1・5畧とる。同じ場所、柱が
巨大で、柱の直径は0 多い総柱建物（145

鉄、交易で栄えた国存在か

平方屋に建て替えられており、総柱建物は物流に関わる巨大倉庫とみられている。

稲部遺跡は、大規模集落の伊勢遺跡（滋賀県守山市）と入れ替わるように登場。弥生後

弥生末・古墳前期の期から古墳中期まで約
 堅穴建物23棟からは鉄
 片など約6ヶ分が出
 土。集落からの出土と
 しては全国的にも屈指
 の量という。ハンマー
 として使った石や、鉄
 の矢筈も出土したこと
 から、市教委は、鉄器
 生産を専業とする工房
 で、鉄製武器などを作
 っていたとみており、
 「地域の鉄器生産セン
 ターではないか」と話
 している。

現地説明会は22日午
 後1時半〜3時。



遺跡からは福井、岐阜、静岡、奈良、鳥取など各地の土器も出土、3世紀の物流の中心的な遺跡とみられるという。

2016.10.18.神戸新聞朝刊





邪馬台国の時代 鉄で栄えた大都市集落 滋賀県彦根市「稲部遺跡」

弥生時代終末から古墳時代初め(3世紀前半)の鉄器工房群の遺構出土 交通の要衝「いなべ国」? 「日本の国の成り立ちを考えるうえで貴重」

滋賀県彦根市教委は17日、市内の「稲部（いなべ）遺跡」（同市稲部、彦富両町）で弥生時代終末から古墳時代初め（3世紀前半）の鉄器工房群の遺構が見つかったと発表した。同時代では他にない規模という。大規模な建物の跡も確認された。当時、鉄製品の原料は大陸からの調達に頼っており、同時代の邪馬台国について記した中国の史書「魏志倭人伝」で、大陸と交易があったとされる「三十国」の一つともみられるという。

鉄器工房は30棟以上ある竪穴建物群で、各棟は一辺3.5～5.3メートルの方形。うち23棟の床面から鉄片や鉄塊が見つかった。一部に土なども含んだ状態だが、全体の重さは計約6キロに上るという。同時に鍛冶や鉄を加工する際に使ったと思われる台石や、鉄製矢尻2個なども見つかった。国内には当時、製鉄技術がなく、鉄の延べ板を朝鮮半島から取り寄せ、武器や農具、工具を造っていたと考えられる。一方、鉄器製造が始まった直後に大型の建物が現れた他、鉄器製造が終了した3世紀後半には、一辺十数メートル規模の大型の建物2棟が相次ぎ出現。首長の居館や巨大な倉庫として利用され、他の国との物流拠点だった可能性があるとしている。

邪馬台国畿内説の有力候補地とされる纏向（まきむく）遺跡（奈良県桜井市）では、より大規模な同時代の建物跡が確認されている。「魏志倭人伝」では、倭人は現在の韓国・ソウル辺りにあった帯方郡の東南の大海の中にいて、もとは「百余国」あったが、同書が書かれた3世紀には「使訳（使者や言葉）通ずる所三十国」と伝えている。

福永伸哉・大阪大教授（日本考古学）は「稲部遺跡は東西日本の結節点にあり、近江勢力の大きさを物語ると共に日本の国の成り立ちを考えるうえで貴重」と話す。

Copyright 毎日新聞

琵琶湖

彦根市街地

荒神山
荒神山前方後円墳

宇曽川

稲部遺跡

JR稲枝駅

愛知川

邪馬台国の時代 鉄で栄えた大都市集落 滋賀県彦根市「稲部遺跡」の位置
滋賀県彦根市稲部町441

Go

弥生終末期～古墳前期 「鉄」で栄えた近江の中心都市集落 稲部遺跡

琵琶湖交通・北陸や美濃・尾張・伊勢など東日本と畿内をつなぐ交通の重要な結接点



近江の前期古墳位置図

卑弥呼の時代の大陸交通の要衝近江での鍛冶遺跡群の出土。しかも 鉄の物流を担う拠点都市集落の性格が強いという。現地説明会が 10 月 22 日開催されると聞いて 興味津々で出かけました。

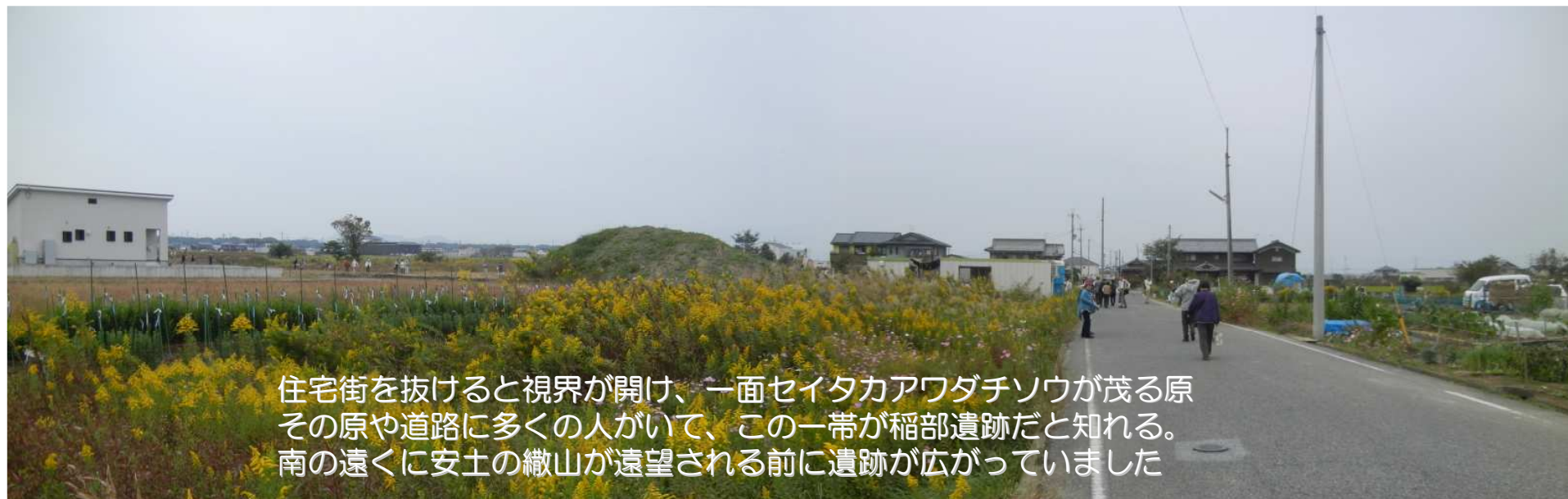




東口より北へ歩いてすぐ小さな溝を渡るJRの下をくぐって、に西の琵琶湖湖岸へ向かう
駅から現説に向かう人のため、要所要所に彦根市の人が立って道案内してくれる 12:19



JRを潜り抜けると琵琶湖岸へ向かう一本道 新興住宅街をぬけたところが、稲部遺跡である



住宅街を抜けると視界が開け、一面セイタカアワダチソウが茂る原
その原や道路に多くの人がいて、この一帯が稲部遺跡だと知れる。
南の遠くに安土の織山が遠望される前に遺跡が広がっていました



一時間もすると次々と現地説明会に詰めかける人たちでいっぱい。
南の遠くに安土の織山が遠望される前に遺跡が広がっていました

20106.10.22. 12:25



平成 28 年度 いなべ 稲部遺跡発掘調査現地説明会資料

平成 28 年 10 月 22 日

彦根市教育委員会 文化財課

1 はじめに

彦根市教育委員会では、彦根市稲部町・彦富町において稲部遺跡の発掘調査を実施しました。この調査は、市道芹橋彦富線道路改良工事に関わる調査で、稲部遺跡としては 6 回目と 7 回目の調査となります。第 6 次調査区は、独立棟持柱建物、井戸、金属器工房からなる儀礼空間の南側に位置し、第 7 次調査区は、密集する竪穴建物群と方形区画が確認された第 3 次調査区の南側に位置します。調査期間は、第 6 次が平成 27 年 6 月～平成 28 年 3 月、第 7 次が平成 27 年 11 月から開始し、現在調査中です。調査面積は、第 6 次が 1042.33 m²、第 7 次が 430.37 m²です。

2 調査地の位置と環境

調査地は標高約 90.00m 前後の旧愛知川の微高地上にあたります。微高地の北には旧愛知川である文祿川が、やや南には同様に旧愛知川である来迎川が流れています。周辺では弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が密集して分布しています。

稲部遺跡と稲部西遺跡を含む稲部遺跡群は、昭和 56 年（1981）の宅地造成工事に伴ってはじめて調査されました。その後、平成 25 年（2013）から開始された市道改良工事に関わる調査において独立棟持柱建物、大型建物、方形区画、金属器工房などが発見され、現在までに 180 棟を超える竪穴建物が検出されていますが、第 6 次調査で大型建物 3 棟が、第 7 次調査で大型建物 2 棟、超大型建物 2 棟、大規模な鍛冶工房群が確認されたことにより、稲部遺跡群の全体的な遺構の変遷が明らかとなりました。また、稲部遺跡群調査指導検討会（平成 28 年 9 月 7 日開催）における調査成果の審議を経て、稲部遺跡群が、弥生時代から古墳時代にかけての日本の国家形成期を考える上で極めて重要な遺跡であると評価されています。

3 調査の概要

(1) 第 6 次調査

大型建物 3 棟を含む掘立柱建物 6 棟以上、竪穴建物 20 棟以上、排水溝 4 条、大溝 1 条などを検出しました。

倉庫・儀礼施設とみられる大型建物 3 棟（23.80 m²以上、30.70 m²以上、推定 50.60 m²の独立棟持柱建物）が弥生時代終末から古墳時代前期（3 世紀中葉から後葉）にかけて連続して同じ場所に建てられる集落の中心的な儀礼空間です。儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とほぼ同じ時期です。

大溝からは土師器とともに韓式系土器も出土しています。

(2) 第 7 次調査

鍛冶工房の可能性が高い竪穴建物 23 棟以上を含む竪穴建物 30 棟以上、排水溝 2 条、方形区画の一部である溝、塀の可能性のある柵列を検出しました。

弥生時代終末から古墳時代初頭（3 世紀中葉）には、倉庫・儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とその内側の大型建物 1（独立棟持柱建物・43 m²）が出現し、方形区画の南側では大規模な鍛冶工房群で鉄器（鉄製武器や農具）生産が行われています。

その後、古墳時代前期前半から後半（3 世紀中葉から 4 世紀）にかけて、方形区画を切ってさらに新しい大型建物 2（63 m²）・超大型建物 1（188 m²）・超大型建物 2（145 m²）が柵（塀の可能性のある。）を伴って

出現します。特に、超大型建物 1 は、稲部遺跡（奈良県桜井市）第 166 次調査の超大型建物（238.08 m²）に次ぐ日本列島屈指の規模です。大型建物 2・超大型建物 1 は、居館域の一部を構成する建物であり、超大型建物 2 は、王権の関与する巨大な倉庫である可能性が考えられます。

4 まとめ

○北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある 3 世紀の近畿北部の中心的な遺跡です。これは、大和（奈良県）、伯耆（鳥取県）、越前（福井県）、湖南地域（滋賀県南部）、美濃（岐阜県）、尾張（愛知県）、伊勢（三重県）、東遠江から駿河（静岡県東部）の各地域の土器の出土からも各地からの交渉があり、交流の要、物流の中心地となっていることが裏付けられます。朝鮮半島の渡来人との関係を示す韓式系土器も出土しています。

○直径数百 m、面積約 200,000 m²、弥生時代後期中葉（2 世紀）から古墳時代中期（5 世紀）にかけて継続する巨大な集落です。

○青銅器の鋳造、朝鮮半島から運ばれた鉄素材をもとに鉄器の大規模な生産を行っており、大型建物・超大型建物や独立棟持柱建物という首長層が居住したり、儀礼に使用したと考えられる建物と区画が時代を経るごとに出現し、王権との関わりによって政治色を強めていく過程を示しています。

○祭祀都市・政治都市としての面を強く持ち、工業都市としての面もあわせ持つ近江の巨大勢力・クニの中枢部であり、3 世紀の国内屈指の遺跡です。

○3 世紀前半を中心とするヤマト政権が成立しつつある時代、日本の歴史上でも非常に重要な時期の大集落です。日本列島における倭国の成り立ちを考える上で、今までにない極めて重要な遺跡です。

○3 世紀の時代にとどまらず、4 世紀から 5 世紀には、巨大倉庫の出現によって物流拠点として発展・継続し、韓式系土器（三国時代・3～7 世紀の朝鮮半島南部地域から渡来人が持ち運んだり、すでに日本に住んでいた人々が朝鮮半島の土器をまねて作った土器）の出土から、朝鮮半島と交流し、当時の最先端技術を渡来人から導入していた可能性があります。

○ヤマト政権との関係を前提として、荒神山古墳の築造に関わる巨大勢力の本拠地である可能性を含め、荒神山古墳との深いつながりをもつ遺跡です。

○稲部遺跡では、縄文時代後期（今から 4,500 年前）から中世（今から 500 年ほど前）までの遺構と遺物が見つかっています。中でも、弥生時代後期中葉（紀元 2 世紀）から、古墳時代前期（4 世紀）にかけての非常におおきな集落がみつかりました。これは、「ムラ」というよりも、むしろ「クニ」の中枢部のような集落で、非常に学術的価値の高いものです。教科書にも載っている「魏志倭人伝」（中国の歴史書）が伝える「邪馬台国」とほぼ同じ時代の遺跡です。「魏志倭人伝」に書かれる「倭（日本のこと）」には、「邪馬台国」という大きな国があり、「卑弥呼」という女王がいた、と書かれていることがよく知られますが、その続きには日本の中に邪馬台国の他に魏と外交関係をもつ三十か国がある、とあります。その三十か国のうちのひとつが、稲部遺跡である可能性が出てきました。ただし、まだ遺跡全体の 2 割程度しか明らかになっておらず、周辺にはさらに重要な遺構が存在している可能性が高いものと考えられます。大型建物や超大型建物の上部構造、方形区画内の遺構の解明、鍛冶工房群の実態とその広がり、集落の構造などについてもさらに検討していく必要があります。荒神山古墳の築造背景や被葬者との関係についても大きな課題です。

発掘調査にあたりましては、関係機関、地元関係者の方々から多大なるご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。非常に重要な遺跡の保護のため、更に周辺の調査を推進し、稲部遺跡群の構造や遺構の性格を明らかにしていきたいと考えております。

解説シート

○「邪馬台国」と「三十国」とは：3世紀末に書かれた中国の魏の歴史書「魏志倭人伝」では、もともと百余りのクニがあり、それがやがて魏と外交関係をもつ三十のクニになり、クニにはそれぞれ王がおり、邪馬台国には大倭王がいると記されます。邪馬台国には卑弥呼もいたとされ、当時の日本（倭国）の様子を知る唯一の文献資料です。

○「大型建物」とは：大型建物とは拠点集落の特別な場所に建てられた約 20 m²以上の大規模で、希少性の高い特別な建物です。居館、祭殿、倉庫などの機能が考えられています。100 m²以上は超大型建物とされ、数はきわめて少ないものです。

○「居館」とは：地域支配や経営の拠点としての性格を備え、弥生時代末から古墳時代初めに柵や溝で方形に区画した空間（方形区画）が顕著に発達し、一般の人々の居住域と離れて出現するものです。古墳時代前期には豪族居館のみが濠・溝をめぐらすようになります。こうした集落の変化は、古墳の出現と連動し、社会が支配するものと支配されるものとに分かれ、それぞれの居所が違う場所になったことを示します。

○「鉄」について：当時の権力を支えた貴重な資源の一つ。朝鮮半島から鉄素材を調達し、専門の工人が鍛冶で鉄製の武器や農工具を作っていました。鉄資源流通ルートの確保がヤマト政権にとっては一大事でした。

豆知識

○発掘調査ってなに？

遺跡がある場所に道路や建物を作ると、遺跡は壊れてなくなってしまいます。遺跡は私たちの祖先が生きてきた大切な証であり、国民の財産ですので、壊れてしまう前に記録をとり、重要な遺跡である場合には、壊さずに大切に保存し、市民の皆さんに活用してもらうようにします。

○どうやって遺跡があるかわかるの？

地面の下に遺跡があるかどうかは試掘調査をしないとわかりません。開発をする前に、試し掘りをしたりして現地を確認し、遺跡があるかどうか確かめます。遺跡があることがわかれば、どうしても破壊が避けられない場合に「本調査」といって、専門の職員によって調査を行います。



遺構配置図 (いこうはいちず)

(弥生時代後期中葉から後葉 2世紀) 竪穴建物による集落が形成。鍛冶工房1棟。多角形建物の居住域。

(弥生時代終末 3世紀初頭から前葉) 北端部に独立棟持柱建物、井戸、金属器工房からなる儀礼空間が形成。周溝付建物の居住域。

(弥生時代終末 3世紀前葉から中葉) 竪穴建物約60棟。方形区画の南側で鉄器生産が開始。北端部の儀礼空間は継続。

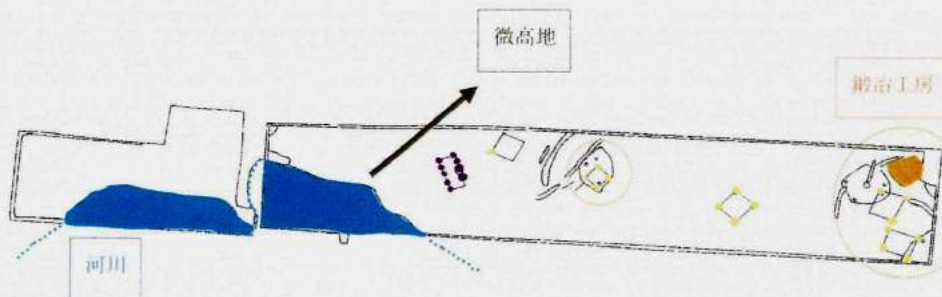
(弥生時代終末か)

操業は最盛期。倉庫

方形区画と儀礼空間(6次)が成立し、併存。集落内の機能分化・階層分化が顕著になり、首長層の台頭。

(古墳時代前期前半 3世紀中葉から後葉) 方形区画を切って大型建物・超大型建物(居館や倉庫の可能性)が柵(塀)による区画を伴って出現(7次)。ヤマト政権との関係によって、権力の増大と安定。

(古墳時代前期後半から古墳時代中期 4世紀から5世紀) 超大型建物が出現し、ヤマト政権下の物流拠点として機能。大溝の掘削と韓式系土器の出土。

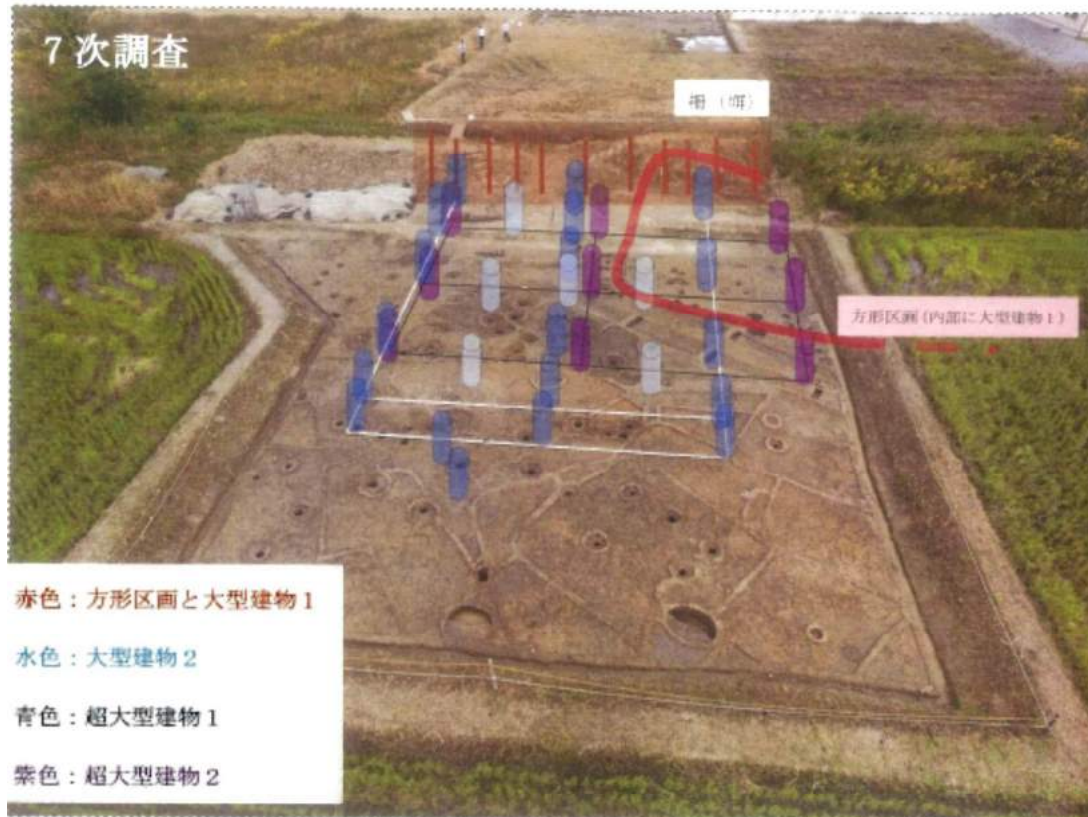


稲部西遺跡



稲部遺跡

7 次調査



赤色：方形区画と大型建物 1

水色：大型建物 2

青色：超大型建物 1

紫色：超大型建物 2

【7 次調査】

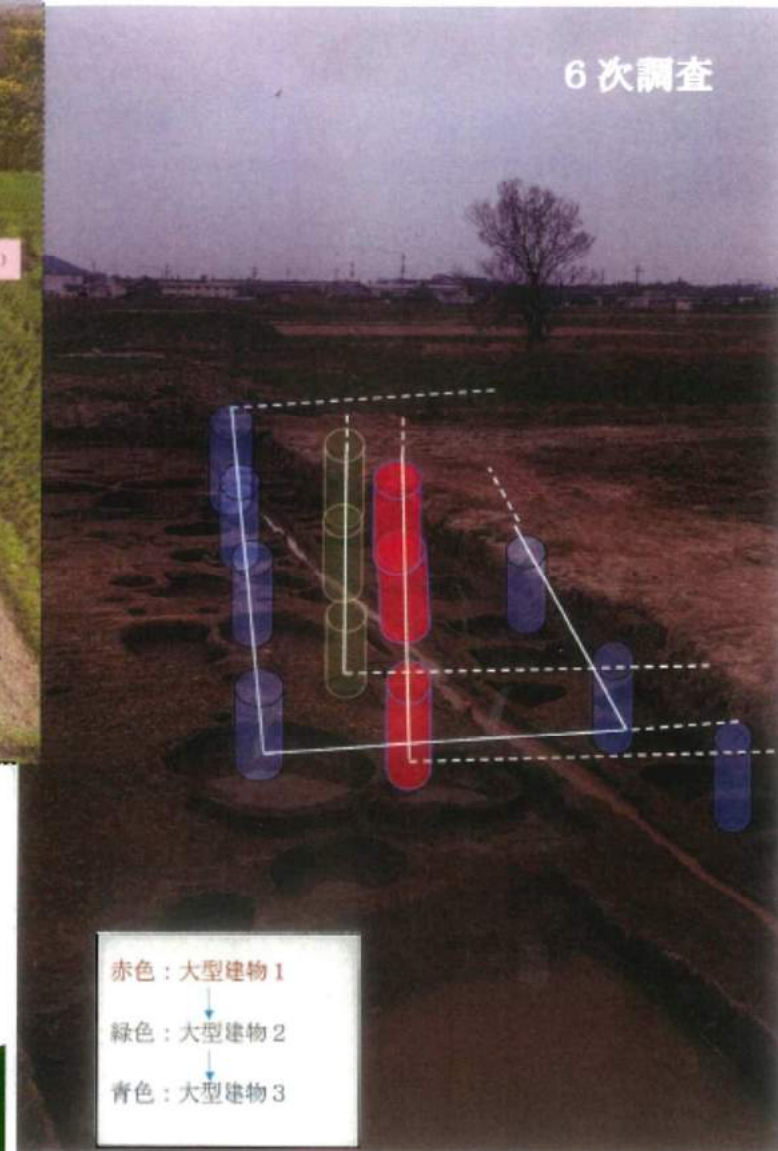
方形区画・大型建物 1 (弥生終末～古墳初頭・3 世紀)
43 m² 棟持柱建物
大型建物 2 (古墳前期前半・3 世紀中葉～後葉) 63 m²
超大型建物 1 (古墳前期前半・3 世紀中葉～後葉)
188 m² 稲部遺跡で最大規模の建物
超大型建物 2 (古墳前期前半以降・4～5 世紀) 145 m²

【6 次調査】

大型建物 1 (弥生終末～古墳初頭・3 世紀) 23.80 m²以上
大型建物 2 (弥生終末～古墳初頭・3 世紀) 30.70 m²以上
大型建物 3 (古墳前期前半・3 世紀中葉～後葉)
推定 50.60 m² 棟持柱建物

大型建物と超大型建物

6 次調査



赤色：大型建物 1

緑色：大型建物 2

青色：大型建物 3



3 世紀前半の東アジア
(大阪府立弥生文化博物館 1999『卑弥呼誕生』改変)



しもなが
下長遺跡 (滋賀県守山市) 独立棟持柱建物の復元 (滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見えてくるもの』)

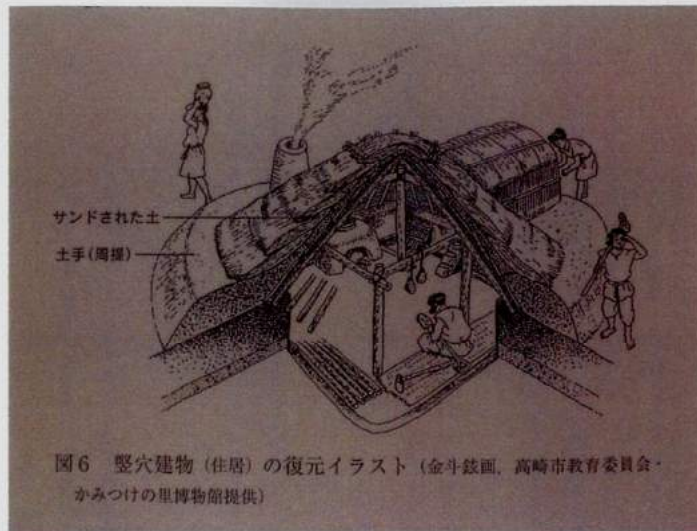


図6 竪穴建物(住居)の復元イラスト (金斗鉉画, 高崎市教育委員会・かみつけの里博物館提供)

竪穴建物の復元図 (若狭徹 2015『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館)



しもなが
下長遺跡 (滋賀県栗東市) 独立棟持柱建物の復元 (滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見えてくるもの』)



サラワク族の鍛冶作業風景
(村上恭通 1999『倭人と鉄の考古学』青木書店)

1920 年代のジャワ・スマトラ島に住むサラワク族の鍛冶作業風景です。

屋外で作業しており、ピストン^{ピストン}を吹く一人(左)がいて、その隣で三人(右)が炉の傍で鍛打の作業を行っています。二人は^{くわ}で固定した石錠をふるい、金床石も^{くわ}で固定され、緩衝材として木材の上に置かれています。鍛冶炉はほとんど掘りこまれていません。長い棒状の素材の先を加工したピンセット状の道具で挟んでいます。

弥生時代の石器主体の鍛冶具のあり方や鍛冶技術を考える上でとても参考になる民族誌です。工房の様子や作業空間など、当時の鍛冶技術はまだまだ分からないことが多く、民族誌を参考にした発掘調査成果の比較検討が期待されます。

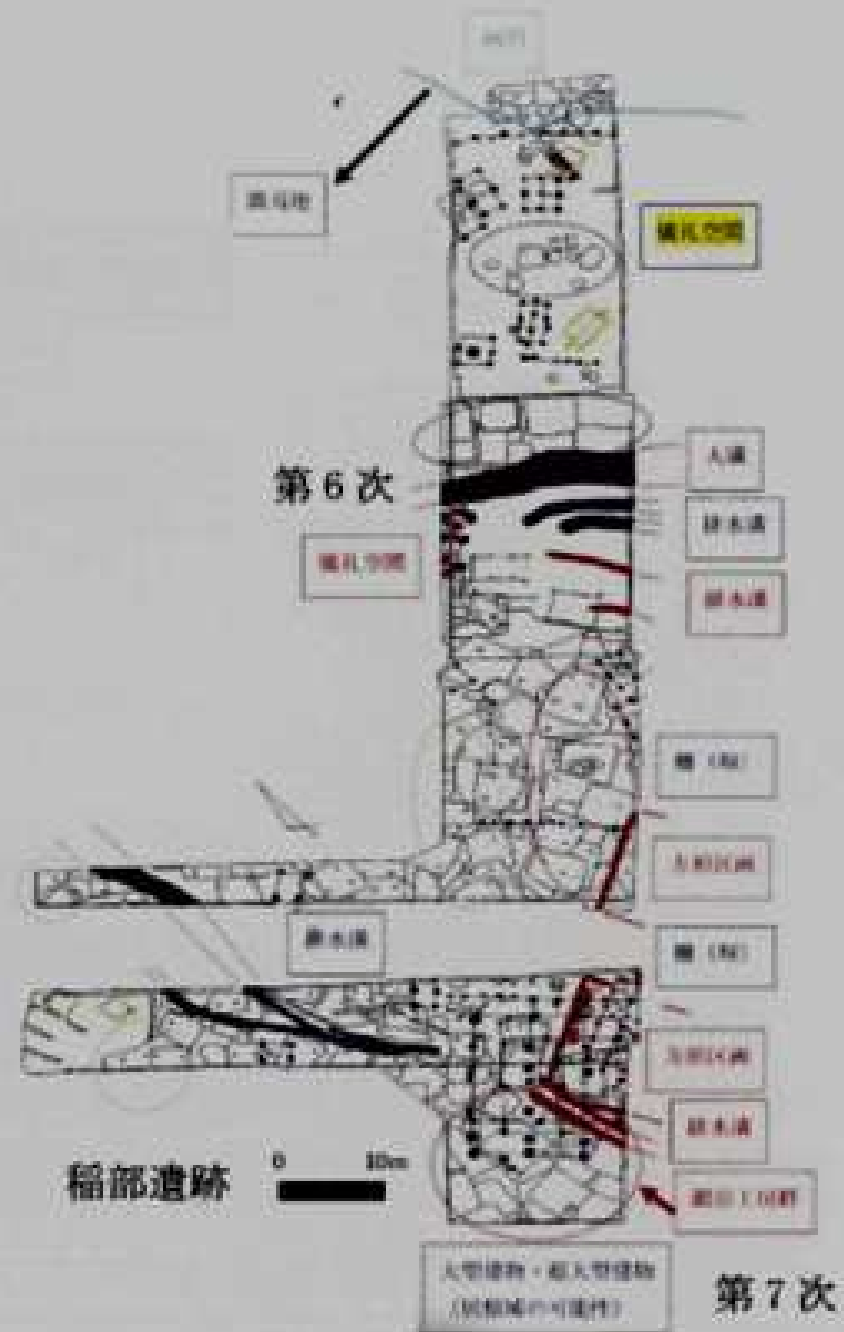
表 東アジア史年表と稲部遺跡群の動向

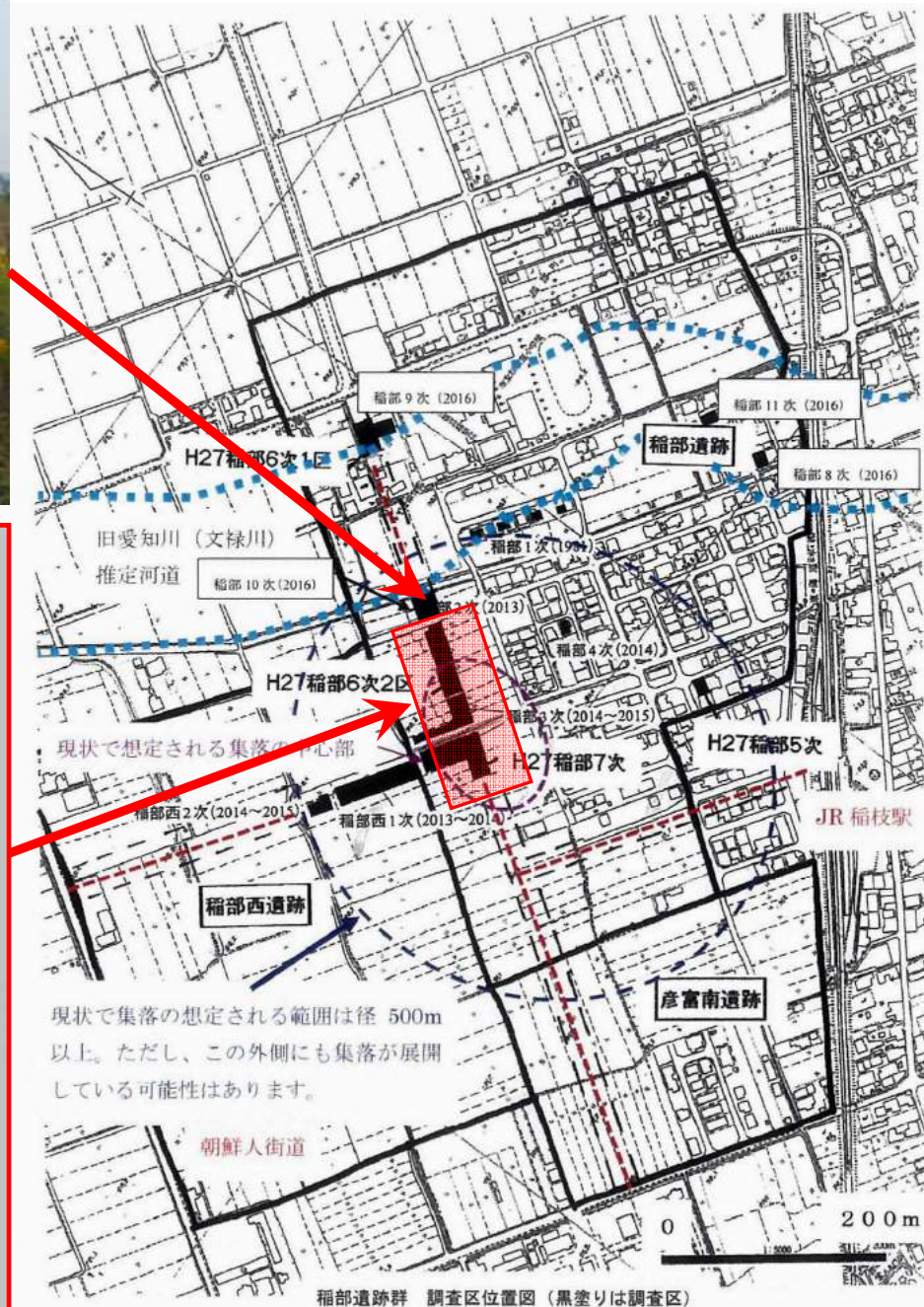
西暦	時代	日本（倭）のできごと	稲部遺跡群ほかのできごと	王朝	主な皇帝	中国・朝鮮半島のできごと
100	弥生時代後期	107 倭国王帥升らが後漢に朝貢する。	堅穴建物による集落が形成され、西側では多角形の堅穴建物が展開する。 （伊勢遺跡で巨大なマツリ場が成立する。） 小規模な鉄器生産が開始される。 伊勢遺跡（守山市の大遺跡）が終焉を迎え、銅鐸祭祀もなくなっていく時期です。 	後漢	和帝 安帝 順帝 桓帝 靈帝	184 黄巾の乱。 190 遼東太守公孫度が自立を強める。 204 公孫康が帯方郡を設置する。 208 曹操と劉備・孫権との赤壁の戦い
150		このころ倭国乱。 このころ卑弥呼が共立される。			文帝	220 曹丕が皇帝となり、魏を興す。 221 劉備が皇帝となり、蜀を興す。 222 孫権が自立して、呉を興す。 234 魏と蜀の五丈原の戦い。 236 遼東の公孫淵が燕を興す。 238 魏が公孫氏を滅ぼす。
200	弥生時代終末期 庄内式期	239 卑弥呼が難升米らを魏に派遣する。 240 帯方郡からの使者が倭国に派遣される。 243 卑弥呼、使いを送る。邪馬台国と狗奴国との戦い。 247 卑弥呼、使いを送る。 248 このころ卑弥呼が亡くなる。再び戦乱が起こる。香与が女王となる。	堅穴建物による集落が継続し、集落の西側で周溝付建物が出現する。（大和東南部で縦向遺跡が出現する。） 北端では独立棟持柱建物（儀礼施設）と金属器工房（鉄器生産と青銅器鋳造）が出現する。 堅穴建物が急激に増え、掘立柱建物も増える。北端では独立棟持柱建物によるマツリ場が槽によって区画さ 南側の堅穴建物群の一面で大規模な鉄器生産が行われる 多数の堅穴建物群による集落が継続し、南側では方形区画（居館や儀礼施設の可能性）と独立棟持柱建物が出現する。方形区画南側の大規模な鉄器生産は最盛期を迎える。	三国（魏・呉・蜀）	明帝（魏）	263 蜀が滅びる。 265 司馬炎が西晋を興す。
250		266 香与が西晋に朝貢する。			武帝 孝惠帝	280 西晋が呉を滅ぼし、中国統一する。 301 八王の乱が始まる。華北混乱。 313 高句麗が楽浪郡を滅ぼす。
300	古墳時代前期 布留式期	この時代、こんなに大きな建物のある遺跡は珍しい！ クニの中核部で、地域の有力者がいたことは間違いありません。	鉄と交易の時代に栄えた稲部遺跡 溝による方形区画のあった場所で、新たに槽による区画を伴う超大型建物（居館の可能性）が出現するとともに、北側では大型の独立棟持柱建物（儀礼施設）が建 その後、巨大な倉庫が建てられる。 稲部遺跡はずいぶん長い間続いた集落だねえ。	西晋		倉庫の中には何が？物流センターだったんだね！
350		367 百済の使者が倭国に派遣される。			東晋	
400	古墳時代中期	413 倭王讃が東晋へ使いを送る。 425 倭王讃が宋へ使いを送る。 438 倭王珍が宋へ使いを送る。 443 倭王済が宋へ使いを送る。 478 倭王武が宋へ使いを送る。	掘立柱建物による集落が継続し、大溝が掘削される。朝鮮半島系の土器（百済の陶質土器など）がもたらされる。 荒神山古墳（大型前方後円墳）が築造される。 荒神山古墳は国指定史跡。どうして荒神山に大古墳が作られたのだろうか？はたしてどんな王が眠っているのでしょうか？周辺は、わくわくする謎でいっぱいです。 	宋		404 高句麗が倭と戦う。
450					齊	
500				梁		

三国志の時代

五王の時代「倭」の

国外との関係も？！







入口の出土遺物展示には すでに大勢の人が並んでいる



入口で現地説明会資料を貰って、
現地説明会まで まだ1時間ほどあるので、まず遺跡内へ 2016.10.22. 12:27



第七次調査域と並立した六次調査の北端入口側を眺める 稲部遺跡の中心部【I】



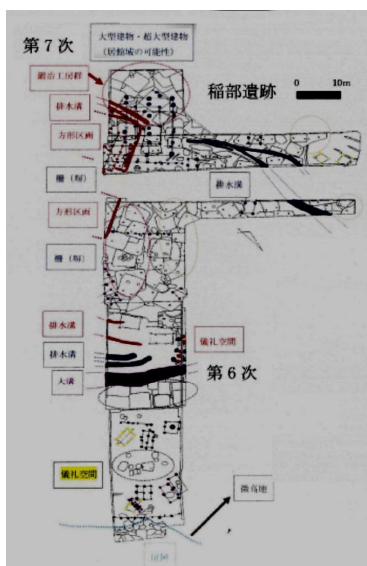


第七次調査域と並立した六次調査区 稲部遺跡の中心部【Ⅰ】

すでに埋め戻されている南そして大溝の北の竪穴住居群に取り囲まれて、
倉庫・儀礼施設と考えられる大型建物遺構が出土



方形区画内大型建物とともに鍛冶工房群が出土した第七次調査区 稲部遺跡の中心部Ⅱ
 纏向遺跡の超大型建物に匹敵する超大型建物が出土
 鉄交易の拠点都市集落の居館城とも考えられる



第七次調査域と並立した六次調査区 稲部遺跡の中心部【Ⅰ】

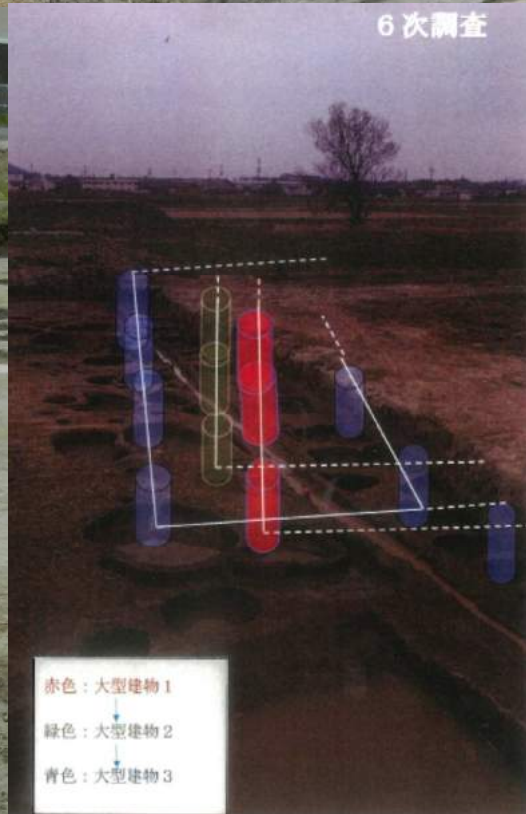
すでに埋め戻されている南そして大溝の北の竪穴住居群に取り囲まれて、倉庫・儀礼施設と考えられる大型建物遺構が出土



現地説明会が始まる13時30分には遺跡の通路はぎっしり
発掘された遺構が見えないすし詰め状態に 2016.10.22



6次調査



北から眺める六次調査区 稲部遺跡の中心部【Ⅰ】

大溝の南西側 竪穴住居に取り囲まれて 儀礼空間・倉庫と推定される
弥生終末～古墳前期前半 大型建物3棟(内1棟は独立棟持柱建物)が 同じ場所に建替え



七次調査域と並立した六次調査区 稲部遺跡の中心部【Ⅰ】

大溝の南西側 竪穴住居に取り囲まれて 儀礼空間・倉庫と推定される
弥生終末～古墳前期前半の大型建物3棟(内1棟は独立棟持柱建物)が 同じ場所で建替え
手前の大溝からは土師器とともに韓式土器も出土



七次調査域と並立した六次調査区 稲部遺跡の中心部【I】

大溝の南西側 竪穴住居に取り囲まれて 儀礼空間・倉庫と推定される
弥生終末～古墳前期前半の大型建物3棟(内1棟は独立棟持柱建物)が 同じ場所で建替え
手前の大溝からは土師器とともに韓式土器も出土



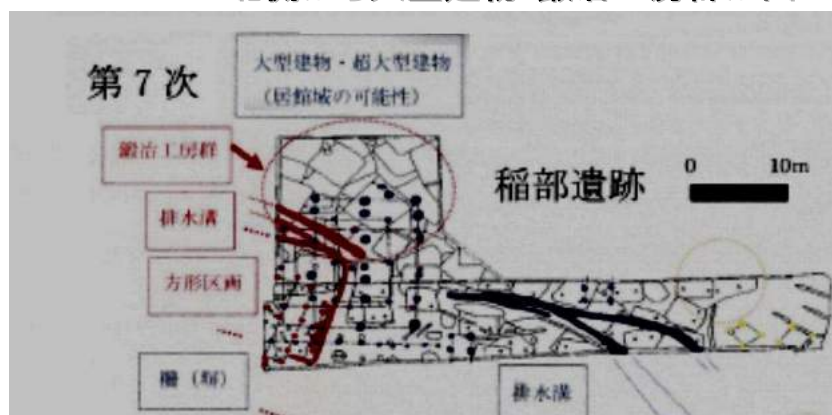
2016.10.22. 稲部遺跡に隣接して 畑で現地説明会の資料に見入る里の人



纏向の超大型建物に匹敵する超大型建物遺構の出土の現地説明会に詰めかけた人たち
すごい人数でした 20106.10.22. 彦根市稲部遺跡 第7調査区



北側から大型建物・鍛冶工房群が出土した七次調査区を眺める 2016.10.22.



3世紀弥生時代の末に 手前左 北東端の方形区画内に大型建物
その周辺から南側全体に23棟の鍛冶工房とみられる竪穴住居を
含め60棟を超す竪穴住居が繰り返し建てられる。

(方形区画内に大型建物1棟)

古墳時代の前葉 3世紀中葉から後葉 ヤマト王権成立期 北か
ら南側に 方形区画を切って柵や塀を伴う大型建物や纏向遺跡の
大型建物に匹敵する超大型建物が建てられる。

(大型建物1棟・超大型建物1棟)

4世紀～5世紀になると さらに超大型建物が出現し、ヤマト王
権下で権力の増大・安定化し、物流拠点として機能する。

(超大型建物1棟)

3世紀 弥生時代の末 手前左端の北東端から手前の土手にかけての方形区画内に大型建物が建てられ、この方形区画
の南側一帯に鍛冶工房群がある。大型建物・鍛冶工房はいずれもこの同じ場所に繰り返し建てられている。そして、
その後 方形区画を切って 新たな南北方向に柱穴が並ぶ大型建物・超大型建物が建てられる。(ポットとポールが
置かれている場所が柱穴の位置)

手前の土手際 北側から南側に大型建物・超大型建物が繰り返し建てられている。





弥生終末～古墳初期・3世紀 方形区画とその内大型建物遺構に隣接して、
20棟を超える鍛冶工房と推定されている竪穴住居群が密集して存在
鍛冶炉が出土していないので実態は不明ですが、床面には点々と細かい鉄滓が散在



弥生終末～古墳初期・3世紀 方形区画とその内大型建物遺構に隣接して、
20棟を超える鍛冶工房と推定されている竪穴住居群が密集して存在
鍛冶炉が出土していないので実態は不明ですが、点々と細かい鉄滓が一带に散在



大型・超大型建物の柱跡がポールとポットで示されている
西北側から左手北側に沿って北東端 方形区画遺構周辺を眺める

この方形区画の周辺を取り囲んで 鍛冶工房群の竪穴住居群

ポールは方形区画を切って 整然と南北・東西軸に並ぶ大型・超大型建物の柱跡。
ヤマト王権に組み込まれながら、さらに勢力を伸ばし、物流拠点としての新しい
時代の始まりを示している。



この竪穴住居はもっと深かったが、後の時代もずっと田園として この地を耕作してきたので、表面部が削られ、出土している柱跡も深い部分である。当時はもっと竪穴住居も深かったという

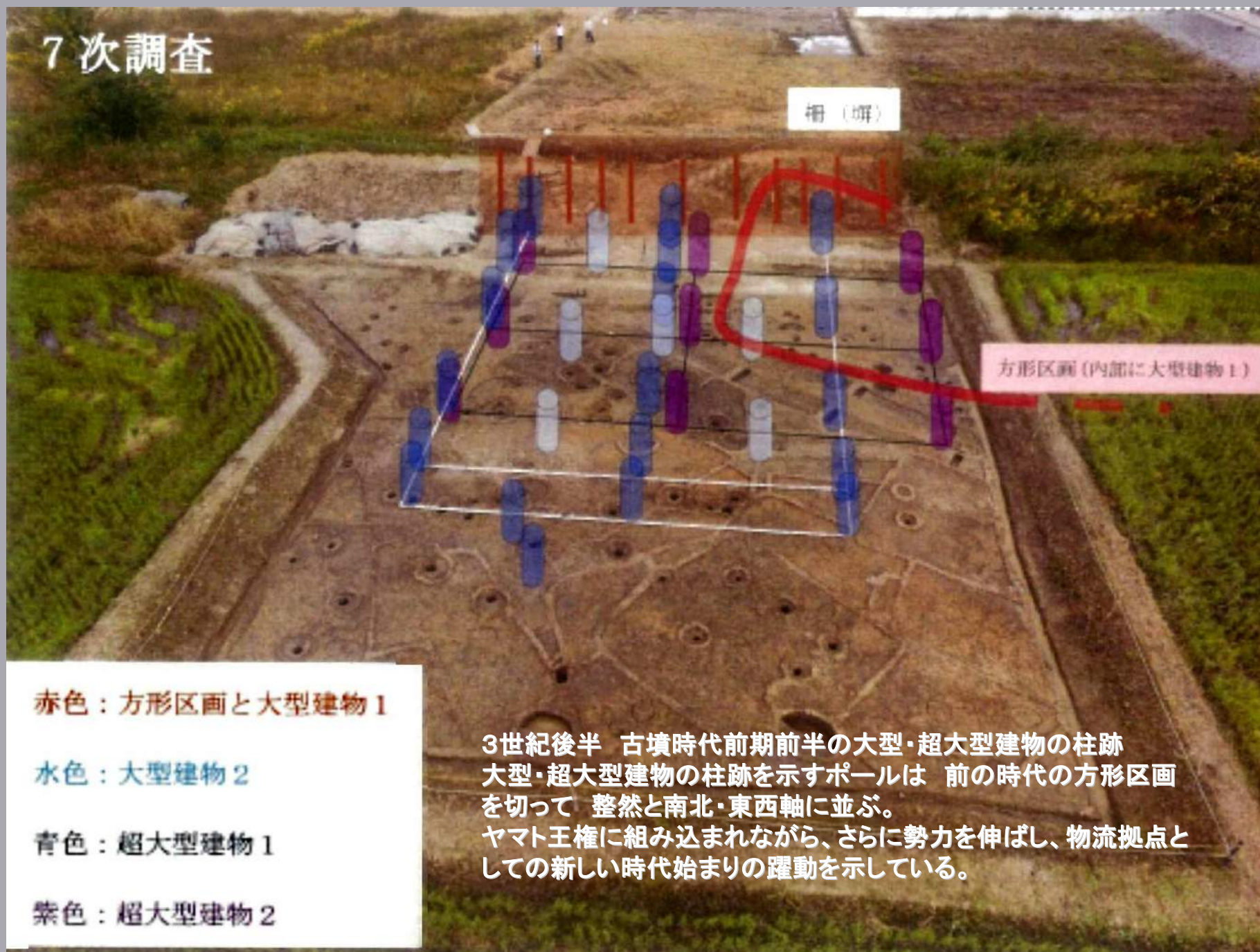
彦根市稲部遺跡 第7調査区 20106.10.22. 現地説明会で



大型建物・超大型建物の柱穴遺構

2016.10.22. 現地説明会

7 次調査



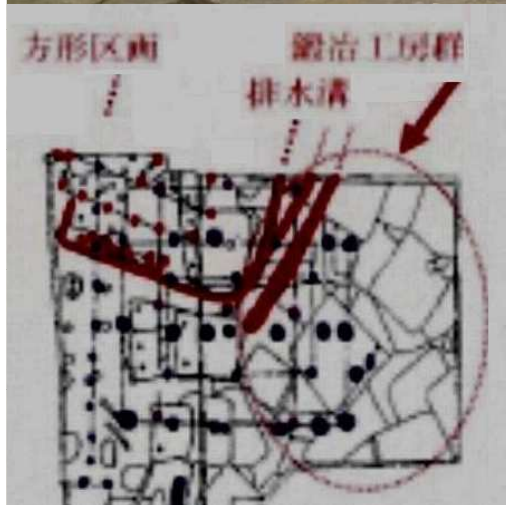
赤色：方形区画と大型建物 1

水色：大型建物 2

青色：超大型建物 1

紫色：超大型建物 2

3世紀後半 古墳時代前期前半の大型・超大型建物の柱跡
大型・超大型建物の柱跡を示すポールは 前の時代の方形区画
を切って 整然と南北・東西軸に並ぶ。
ヤマト王権に組み込まれながら、さらに勢力を伸ばし、物流拠点と
しての新しい時代始まりの躍動を示している。



左手奥溝で区切られた方形区画の周辺には幾つも切りあった竪穴住居跡群は20を超える鍛冶工房跡と推定されている。点々と地面が赤茶けているのは小さな鉄滓が細かく散在しているためという。

鉄器工房各棟は一辺3.5～5.3メートルの方形。うち23棟の床面から鉄片や鉄塊が見つかり、一部に土なども含んだ状態だが、全体の重さは計約6キロに上るという。同時に鍛冶や鉄を加工する際に使ったと思われる台石や、鉄製矢尻2個なども見つかった。しかし、鍛冶遺構を示す鍛冶炉は見つかっておらず、その実態は不明。

古墳時代前期前葉(3世紀半ば)この区域は一遍し、方形区画を切り、鍛冶工房もなくなり、超大型建物150㎡を越える超大型建物が建ち、この地が新時代に入ったことを示す。

稲部遺跡から出土した遺物展示

入口の出土展示コーナー 2016.210.22

13:30から 約1時間の現説が終わって
長い行列が続く、入口の出土遺物展示へ
結局1時間を超えて並びました 15:20

[illegible]

【左: 青銅器鑄型など 二次調査で出土 右: 鉄滓など六次調査】

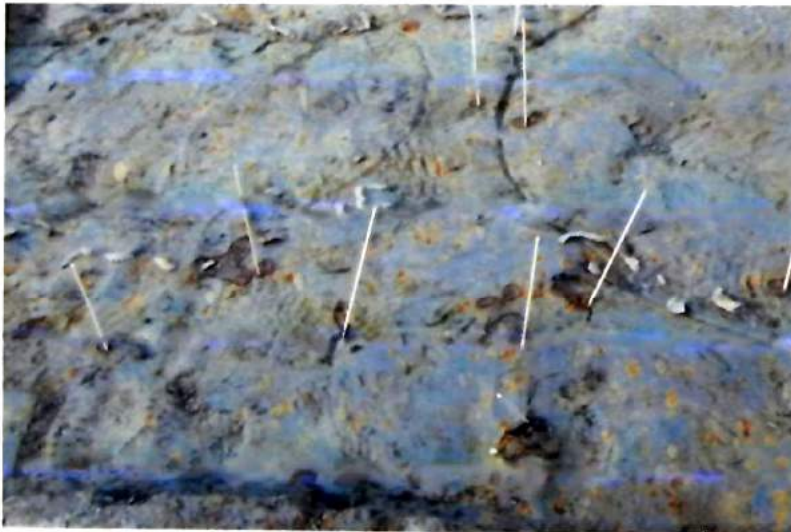
稲部遺跡から出土した遺物展示



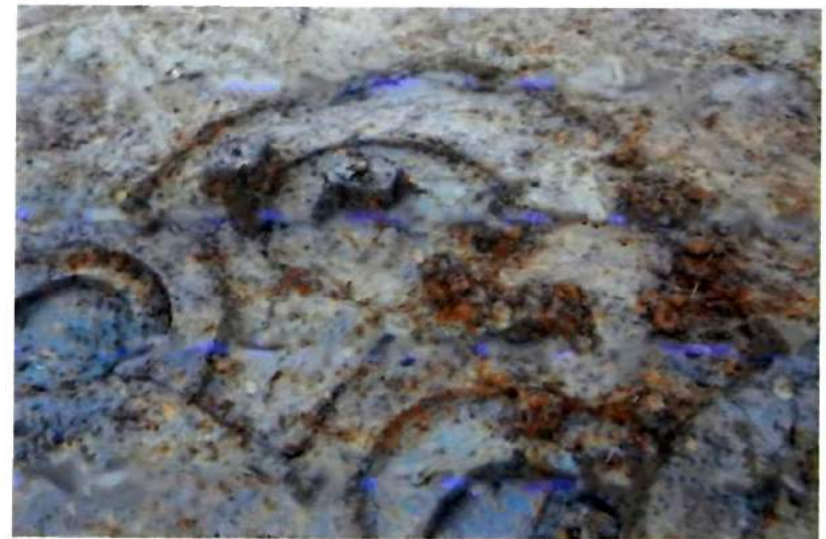
稲部遺跡 7 次 調査区全景



稲部遺跡 7 次 鍛冶工房 鉄片出土状態



稲部遺跡 7 次 鍛冶工房の床面の鉄片と焼土



稲部遺跡 7 次柱穴 鉄片出土状態

7次調査域 鍛冶工房遺構からの鉄片などの出土状況写真

稲部遺跡から出土した遺物展示



7次調査区の鍛冶工房跡周辺から出土した鍛冶関連遺物

鉄片・鉄鏃・鉄滓・たたき石・台石など

稲部遺跡から出土した遺物展示



7次調査域から出土した鉄滓

稲部遺跡から出土した遺物展示



7次調査域から出土した鉄滓・鉄片

稲部遺跡から出土した遺物展示



矢尻・たたき石・石台などの鍛冶具

稲部遺跡から出土した遺物展示



出土した日本各地の土器・土器片や韓式土器

○北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある3世紀の近畿北部の中心的な遺跡です。これは、大和（奈良県）、はつし伯耆（鳥取県）、越前（福井県）、湖南地域（滋賀県南部）、美濃（岐阜県）、尾張（愛知県）、伊勢（三重県）、東遠江から駿河（静岡県東部）の各地域の土器の出土からも各地からの交渉があり、交流の要、物流の中心地となっていることが裏付けられます。朝鮮半島の渡来人との関係を示す韓式系土器も出土しています。

○直径数百m、面積約200,000㎡、弥生時代後期中葉（2世紀）から古墳時代中期（5世紀）にかけて継続する巨大な集落です。

○青銅器の鑄造、朝鮮半島から運ばれた鉄素材をもとに鉄器の大規模な生産を行っており、大型建物・超大型建物や独立棟持柱建物という首長層が居住したり、儀礼に使用したと考えられる建物と区画が時代を経るごとに出現し、王権との関わりによって政治色を強めていく過程を示しています。

○祭祀都市・政治都市としての面を強く持ち、工業都市としての面もあわせ持つ近江の巨大勢力・クニの中核部であり、3世紀の国内屈指の遺跡です。

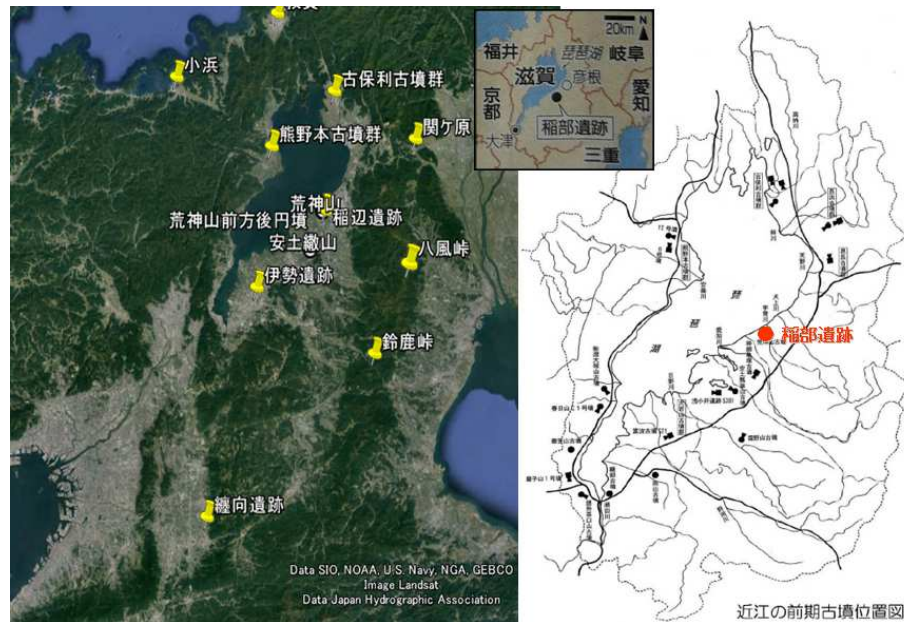
○3世紀前半を中心とするヤマト政権が成立しつつある時代、日本の歴史上でも非常に重要な時期の大集落です。日本列島における倭国の成り立ちを考える上で、今までにない極めて重要な遺跡です。

○3世紀の時代にとどまらず、4世紀から5世紀には、巨大倉庫の出現によって物流拠点として発展・継続し、韓式系土器（三国時代・3～7世紀の朝鮮半島南部地域から渡来人が持ち運んだり、すでに日本に住んでいた人々が朝鮮半島の土器をまねて作った土器）の出土から、朝鮮半島と交流し、当時の最先端技術を渡来人から導入していた可能性があります。

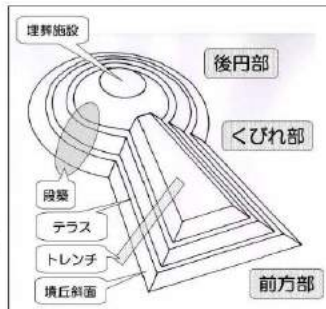
○ヤマト政権との関係を前提として、荒神山古墳の築造に関わる巨大勢力の本拠地である可能性を含め、荒神山古墳との深いつながりをもつ遺跡です。

参考1 荒神山と荒神山古墳と稲部遺跡

稲部遺跡のすぐ北にあり、琵琶湖交通の目印でもある荒神山には4世紀末 ヤマトと同じ方式で築かれた前兆124mの大きな前方後円墳がある。琵琶湖交通・東国・北陸と畿内を結ぶ要衝 近江稲部の地にあって鉄の交易などの物流を握っていた近江の大勢力の首長の勢力圏にある荒神山。この地に強い勢力があったとは考えられていなかったが、物流拠点をつくる大都市集落がバールを脱ぎ、そして その地に前方後円墳の存在。この稲部の首長がヤマト王権と密接に結びついて重要拠点を握っていたと考えることをよく示しており、日本の国造りに新しい視点を提供する。



荒神山古墳は、彦根市の西方、琵琶湖畔に近い湖東平野の独立丘である荒神山（標高284.1m）の山頂から、北へ約150m下った尾根頂部に位置しています。彦根市教育委員会では、平成15年度～平成19年度にかけて4度にわたり、古墳の範囲確認を目的とする発掘調査を実施しました。調査の結果、荒神山古墳が全長124mを測る前方後円墳（ぜんぽうこうえんぶん）であること、築造時期は古墳時代前期末（4世紀末）であること、墳丘は葦石（ふきいし）で覆われ、前方部・後円部とも3段に築かれていること、各段のテラスには塼（はにわ）が巡っていたことなど、重要な発見が相次ぎ、平成23年2月に国の史跡指定を受けました。本市では「彦根城跡」「彦根藩主井伊家墓所」に次いで3件目の国史跡となり、彦根南西部地域では初めての指定となります。



◆ 古墳の規模 ◆

荒神山古墳は、主軸を北北西―南南東に置き、前方部を北西に広がる琵琶湖に向けた前方後円墳です。古墳の各部位の計測値は次のとおりです。

全長：124m	前方部長：約53m	後円部径：約80m
	前方部長：約61m	くびれ部幅：約52m
	前方部高：約10m	くびれ部高：約9m
		後円部高：約16m

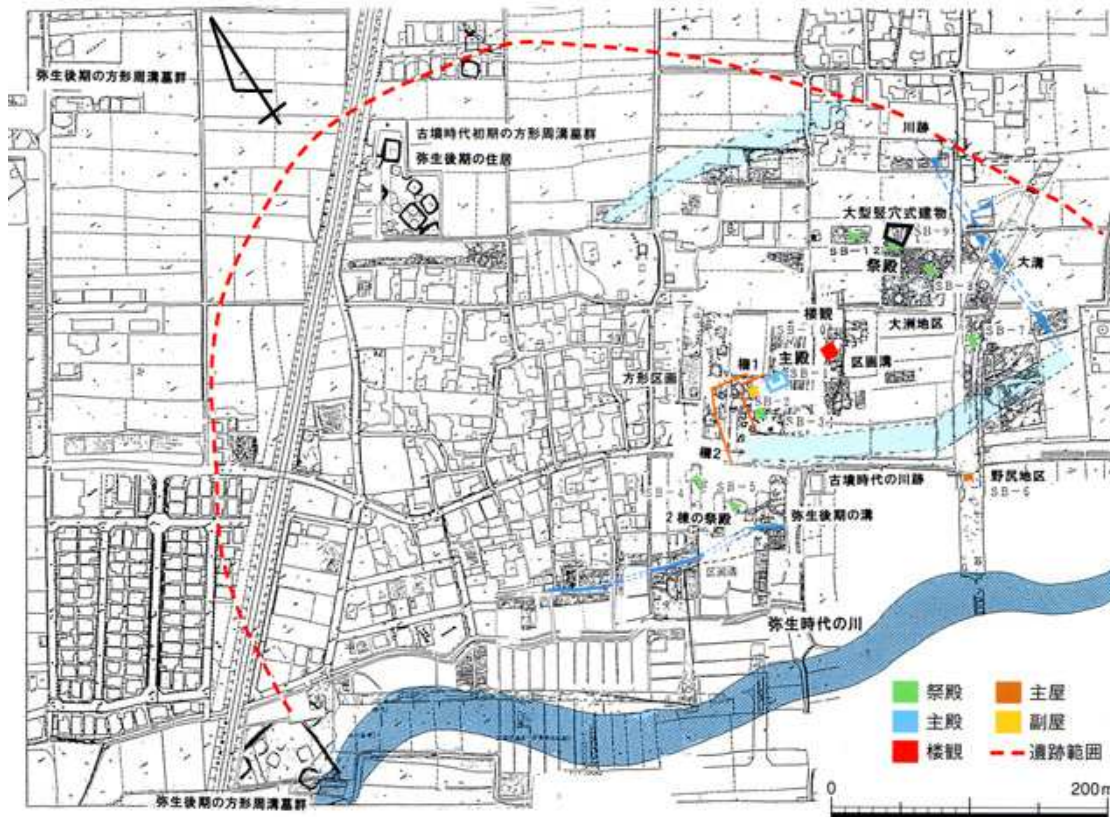
◆ 国史跡 荒神山古墳 彦根市教育委員会

https://www.city.hikone.shiga.jp/cmsfiles/contents/0000003/3477/21_kojinyama_kofun.pdf

参考2. 弥生時代後期の巨大祭祀空間を有する巨大都市集落 守山市伊勢遺跡

彦根の稲部遺跡に先立って、弥生時代の後期(1世紀～2世紀)近江に纏向に匹敵する大型建物や巨大祭祀空間を有する巨大集落遺跡「伊勢遺跡」が琵琶湖交通や畿内交通の要衝 守山市の琵琶湖岸近くに成立していた。

そして、この伊勢遺跡の衰退と入れ替わるがごとく、大型建物と巨大祭祀空間を有する彦根の稲部遺跡が繁栄してゆく。



この伊勢遺跡も野洲川が琵琶湖にそそぐ、琵琶湖交通並びに東国・北陸や畿内と伊勢・西国を結ぶ交通の結節点に存在した都市集落遺跡である。

私も2012年と2013年に邪馬台国の候補地の一つとして、話題になったときに訪れたことがある。

この伊勢遺跡の詳細は下記インターネットにありますので ご参考に。

NPO法人 守山弥生遺跡研究会 発掘された弥生の王国

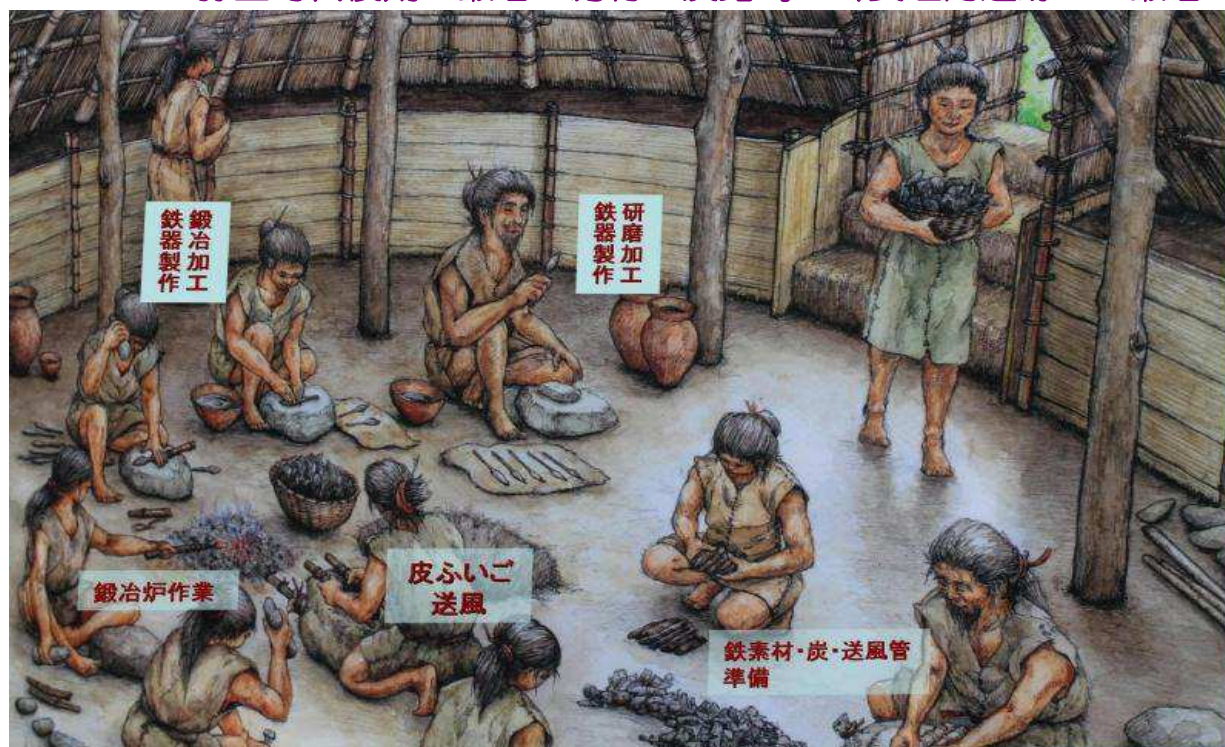
弥生時代後期の巨大政治祭祀空間を有する国史跡「伊勢遺跡」

<http://ise-iseki.yayoiken.jp/index.htm>

参考 3 弥生終末期の鉄交易拠点の都市集落 稲部遺跡

その都市集落内にある工場 鍛冶工房群ではどんな鉄器生産が行われていたのだろうか？

弥生時代後期の鍛冶工房村 淡路島五斗長垣内遺跡 鍛冶工房イメージ図



西に瀬戸内海を見下ろす標高200メートルの尾根上に見つかった弥生時代後期日本最古最大級の鍛冶工房村。

淡路島「五斗長垣内遺跡」現在は住民の手で堅穴建物が復元されている

淡路島 五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産 淡路市教育委員会 伊藤宏幸氏講演 より 2016. 5.28.

<http://www.infokkkna.com/ironroad/2016htm/iron12/1607awajj00.htm>

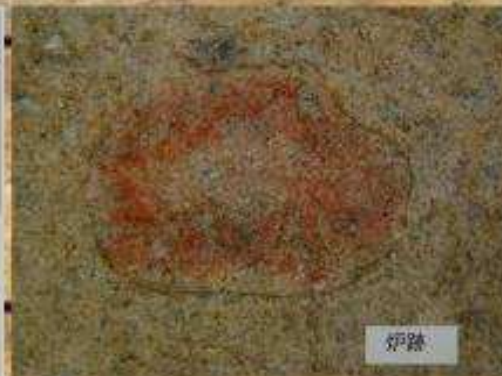
「五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産 -発掘調査と実証実験で見てきたこと-」

淡路市教育委員会伊藤宏幸氏講演 2016.5.29.大阪弥生文化博物館で

今回の講演 弥生後期の五斗長垣内遺跡では すでに高温鍛冶が行われていた可能性を示唆

伊藤宏幸氏は今回の講演で、再現鍛冶作業実験・体験鍛冶作業から、五斗長垣内遺跡の鍛冶加工について 次のように講演

1. 羽口がなくても、周辺の材料(蓮の茎・竹等)で容易に代用品を作り、送風が可能である
2. 送風を行うことで、遺構の炉床に見られたのと同じような1200度以上の維持された高温部が鍛冶炉内に得られる
3. 住居内から大量に見つかり、用途不明だった小粘土塊が代用羽口先端部の耐熱保護材の可能性がある。
4. この再現鍛冶炉を用いた鉄素材として五寸釘 石器による鍛冶工具を用いた体験実習で、小型鍛造工具製作が可能であり、かつ 炉中の素材鉄くぎが相互に融着する場合があるなど鉄素材がまだ 明確ではないものの 鋳切り加工よりも高温鍛造加工がすでにや行われていた可能性を示唆した。



弥生後期 最古・最大級の鍛冶工房村 淡路島五斗長垣内遺跡

出土した鍛冶炉は掘り込みがない炉床構造、羽口が見つからぬことや大型鉄製品は、「板状鉄斧」と呼ばれる鉄製の斧と確認された。また、出土鍛冶工具は石器であり、鉄鋸など小型鉄製品と数多くの裁断片が出土。五斗長垣内遺跡の鍛冶加工は従来の弥生時代の鍛冶の常識に沿い、「高温を必要とせぬ鋳切り加工」が主の鍛冶工房とみられてきた。

まとめ
弥生末から古墳時代前期(3世紀～4世紀)
「鉄」で栄えた近江の中心都市集落「彦根市稲部遺跡」訪問記



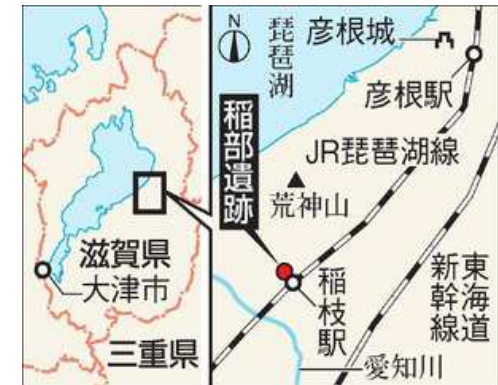
卑弥呼の時代 ヤマトと琵琶湖交通・東国を結ぶ結節点近江に

「大和の纏向遺跡に匹敵する大型建物を持つ 鉄の物流拠点とみられる 都市集落(彦根市稲部遺跡)」が出土 の報に興味津々で出かけました。

大型建物のすぐそばには、繰り返し継続して建て替えられた多数の鍛冶工房とみられる 竪穴住居群が密集する鉄器物流を担う近江の拠点集落で、初期ヤマト王権に組み込まれて、さらに発展してゆく。

大陸の「鉄」の覇権が卑弥呼・初期ヤマト連合をむすびつけ、日本の国づくりが進む。日本の国造りにがかかわっていた鉄の現場に立つことができ、満足感いっぱい。

都市集落の中心 巨大建物が建つ方形区画を取り囲むように数多くの鍛冶工房関連の住居が建ち並んでいるなど想像もつかなかった。まさに鉄が主役の都市空間。



残念ながら、鍛冶炉は出土せず、これらの鍛冶工房でどんな鉄づくりが行われていたかは全く不明のままであるが、卑弥呼の時代そして 初期ヤマト王権へとつながる日本の国造り。「鉄が主役」を実感することができてました。

また、この稲部遺跡の役割 そして 日本の国造りにかかわった鍛冶工房の鉄づくりの検討はまだこれから。

また 一つ 卑弥呼の時代がバールを脱いだ。

夕闇迫るまで遺跡の中において、色々思いをはせつつ、 北に荒神山 南に安土織山 そして今まで何度も出かけてきた近江・琵琶湖を思い浮かべながら、これからの展開に期待いっぱい JR稲枝駅へ 帰ってきました。

弥生終末期～古墳前期 「鉄」で栄えた近江の中心都市集落 稲部遺跡

琵琶湖交通・北陸や美濃・尾張・伊勢など東日本と畿内をつなぐ交通の重要な結接点





卑弥呼の時代鉄交易の拠点都市集落近江「稲部遺跡」の中心部にあった鍛冶工房群跡 2016.10.22.



卑弥呼の時代鉄交易の拠点都市集落近江「稲部遺跡」の中心部にあった鍛冶工房群跡 2016.10.22.

参考資料

1. 平成28年度稲部遺跡発掘調査現地説明会資料 2016.10.22. 彦根市教育委員会
2. 国史跡 荒神山古墳 彦根市教育委員会
https://www.city.hikone.shiga.jp/cmsfiles/contents/0000003/3477/21_kojinyama_kofun.pdf
3. 弥生時代後期の巨大政治祭祀空間を有する国史跡「伊勢遺跡」 NPO法人守山弥生遺跡研究会
<http://ise-iseki.yayoiken.jp/index.htm>
4. 2016.10.18. 稲部遺跡に関する各社新聞報道

参考 関連和鉄の道・Iron Road by Mutsu Nakanishi

1. 「卑弥呼の邪馬台国」の候補地を訪ねる【1】 2012.11.21.& 2013.2.11.
東近江 野洲川南の湖岸近く弥生後期の大集落 守山市伊勢町「伊勢遺跡」を訪ねる
魏志倭人伝の記述《卑弥呼の居処は「宮殿・祭殿」・楼閣・城柵》すべてがそろった弥生後期の大集落
<http://www.infokkna.com/ironroad/2013htm/iron9/1303iseiseki.pdf>
2. 日本初の都市の出現 纏向遺跡を歩く 2012.7.24 & 8.23.
<http://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/iron8/1209makimuku00.htm>
3. 古墳時代 朝鮮半島との交流玄関口「若狭」を再度訪ねる 2011.8.30.
脇袋古墳群など若狭の王墓からの出土品見学 & 若狭小浜港・遠敷(おにゅう)の里 Walk
<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1110wakasa00.htm>
4. 北近江安曇川安曇あずみ会でのプレゼンスライド 2011.12.1
「和鉄の道Iron Road」から見た日本誕生前夜-北近江・若狭が輝いた時代-
<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1112adogawa/1112adogawa.html>
5. 大阪弥生文化博物館2016年春季特別展第3回考古学セミナー聴講 まとめ<2>
「淡路島 五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産-発掘調査と実証実験で見えてきたこと?-」.
弥生後期の五斗長垣内遺跡では、すでに高温鍛冶が行われていた可能性を示唆
淡路市教育委員会 伊藤宏幸氏講演 2016. 5.28.
<http://www.infokkna.com/ironroad/2016htm/iron12/1607awaji00.htm>